

チェホフスキ監督と過ごした3日間

氏間 多伊子

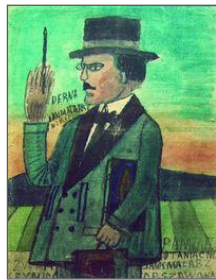
ポーランド大使ロドヴィッチ女史からのプレゼント！ドキュメンタリー監督を派遣してくださったのだ。その人は深く美しい映像を携えてやってきた…。

ポーランド大使館に感謝！

昨2009年2月に第54回例会『カティンの森』の試写会の企画を提供してくださった駐日ポーランド大使館。劇場公開に先駆け、一等書記官のラデックさんの解説付きでとても充実した会だった。参加者の関心の高さは議論としても現れた。



また、今年2010年2月には「ポーランド・デーin札幌」(第3回定例)が開催され当協会の会員が招待された。「さっぽろ雪まつり」にあわせロドヴィッチ駐日大使がご来札され、イベントの一環で映画『ニキフォル—知られざる天才画家の肖像』の上映会があった。この映画の見所はクリスティーナ・フェルドマンという86歳の女優が「寡黙で頑固な男性画家」を演じていたことだが、全く不自然さを感じられない。孤高の画家だったニキフォル(1895-1968)の生涯を、ことさら劇的に描くわけでも、何かを激しく訴えるわけでもない。「こんな画家が、ここにいました」と、ポーランド南部の美しい自然を背景に、一幅の絵



鬼才ニキフォルの原画

のように静かに切り取る。観客はニキフォルが描いたキャンパスの中に、知らぬ間に入り込んだ気分になる。実在した人物像のもつ凄みとラストの曲は、とてもスラヴ的で気持ちを高めへ連れて行ってくれた。終わったあと数人で、狸小路の「コーシカ」でウォッカを舐め、ロシアン・ティーを飲みながら夜更けまで話しこんだ。

その翌月、ドキュメンタリーを数多く手がけている(www.procinema.plの創設者)ヴァルデマル・チェホフスキ監督が、2010年3月18-20日まで札幌を中心に収集・制作活動をおこなうために来札された。思いもかけない幸運に喜んで同行させていただいた。最初の2日間は北海道大学の情報科学研究科の教室でワークショップを開催した。10名ほど

の少人数だったせいもあるが、直に伝わってくる密度の高いものになった。

哲学者&作家ヴィンツェンスの足跡

脚本・監督・撮影すべてご自身による作品“By ways of Vincenz”(仮題:ヴィンツェンスの足跡を追って、57分)を上映した。ポーランドの作家&哲学者スタニスワフ・ヴィンツェンス(Stanislaw Vincenz, 1888-1971)を貴重な映像と周りの人の証言で綴ってゆくのだが、個性の強烈さとあまりの精神性の高さにビックリ。「古代賢者のようだった」とか「座る姿はソクラテス」と当時を語る人もいた。

作品は神と人のつながりの根源、ウクライナや、フツル文化の研究などが中心に描かれている。映画を通してわずかでもヴィンツェンスとの〈対話〉を追体験できるなら、エピクロスの子のように人生を経験し、享受できそうな気にさせられる。宗教も人種も多種多様が彼の至上の価値だったことが良くわかる。ヴィンツェンスは人生の大半は亡命者だった。晩年スイスに居を移す。「いつも山に惹かれていた」が、亡くなるまでフツルを忘れることなく懐かしんでいたことを周囲の人々の証言が物語る。しかし、亡命者の苦しみを背負うことなく、まったく逆に今いる場所に根を下ろしたひとでもあった。たぶん彼は欧州への帰属という問題を自ら解決したのではないかと思う。

フツル人とその文化

フツリシュチナはウクライナの山岳民族で「誇り高く勇敢な」フツル人の居住する地域。ここを舞台にした小説『忘れられた祖先の影』(ムィハーイロ・コツェブィーンシクィイ著)をもとに、セルゲイ・パラジャーノフによって邦題『火の馬』(1964)が映画化されている。フツル人は過去にも多くの作家や画家にインスピレーションを与え、その生活が詩や文学、絵画に描かれている。

長年にわたって受けてきた分割統治という不自然な行政区分にも拘らず、何世紀ものあいだ地域に共通する独自の伝統的秩序、山岳条件、生活様式、羊飼いの法、畜産業、物質面と精神面に及ぶ文化、方言が養成されたのは驚異的なことだ。

「彼らは極めて普遍的だ。そこに人間の実存的経験の精粹があるから。ヴァンツェンス作品は再構成と創造の間、注釈と創作の間にある、人間の祖国が描かれるのであり“天と地”“神と人の共同体”としてホメロスの扱った世界である」と作品の中で学者が語る。ヴァンツェンスの乳母はフツル人だったこともうなずける。

長きにわたる分割統治

1939年にナチス・ドイツとソ連がポーランドを分割したとき、ポーランド領だったフツルリシュチナは大部分がソ連領となる。戦後も1950年代後半まで武力闘争で多くの村がその犠牲となり、1991年にソ連から独立したウクライナの領土となった。この作品に闘争の映像はまったくないが、言葉からその輪郭もあぶり出される。「生の恍惚感」といえるようなものを感じるのは、なぜだろうか。恍惚感とは「生そのものへの衝動」へと移行する。深い感動が内面に迫ってくる。

他のポーランド作品

『タンズと二人の男』(1958) ポランスキー監督が在学中に撮った18分の短編も紹介してくれた。海から二人の男が大きいタンズを抱えて陸に上がって歩き回り、最後に海に帰っていくという不条理ともナンセンスとも映像詩ともいえる作品。また、Tomasz Bagiński氏の“Fallen Art”(英国アカデミー賞最優秀短編アニメーション)は、謎と驚きを盛りこんだ作品だった。

目の当たりにした制作活動

最後の日は、江別市の「ドラマシアターどもIV」を訪問した。れんが造り3階建て(1922年築)旧江別郵便局舎を、現在は民間小劇場・喫茶店に。そこでロ

ドヴィッチ大使の友人の霜田千代磨さんを監督に紹介した。霜田さんは寺山修司(天井棧敷主宰)の東欧公演のときサポートをされたポーランド通。

舞台ではアコースティックな伝承音楽、ブルースやジャズをやっている大学生がギター、マンドリン、フィドルやバンジョーを手にリハーサルをしていた。監督は階下の炊事場でも長い間カメラを回す。薪ストーブや珍しい道具にくぎづけになる。かなり古い磁器の湯のみ茶碗が気に入りわけていただく。

さらに水運が盛んな頃の倉庫群を利用したアートスペース「外輪船」へ。ホールのピアノをみつけると、すかさずショパンの曲を弾く。近くに流れる千歳川を映すため、監督は一気に急勾配の土手にかけてあがった。アイヌ文化にも興味を示され、近くに住んでいる方に連絡し語ってもらい撮影した。着眼が新鮮で、かつ物凄い集中力と行動の人だった。



ワークショップに参加したポーランドの留学生と監督(左端)、筆者(右2人目)

2009年、日本・ポーランド国交樹立90周年を迎えた。今年はショパン生誕200年で、5年に一度のショパン国際ピアノコンクールがある。ポーランドはワイダ、ポランスキー、キェシロフスキを生んだシネマ大国でもある。アンジェイ・ワイダ監督は新作『スウィート・ラッシュ』(英題)で若さと死の対比、取り返しのつかない喪失を描いたという。公開がとても楽しみだ。

第65回例会

Poland Film Selection

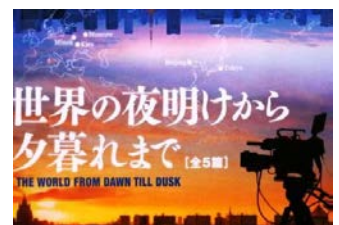
6月8日、9日

札幌プラザ2・5
(旧東宝プラザ)狸小路5丁目

世界を驚かせたドキュメンタリーの
問題作、札幌初上映・両監督来場!
マチェイ・ドルィガス監督/ヴィタ・ジェラケヴィチュテ監督



講演会+作品上映
「統合失調症」
「私の叫びを聞け」



ポーランド映画人による学生
ワークショップ&ドキュメン
タリー制作プロジェクト

2013年6月8-9日(土・日)の両日、《ポーランド映画セレクションⅢ》を開催。普段はなかなかご覧いただけないポーランド映画の名作・新作を札幌市民に見ていただく、この企画は今年で3回目になる。毎回延べ500~600人の観客を集め、日本全土でも例を見ない、大規模なポーランド文化紹介イベントになっている。